
矮小な存在

ただのこうら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矮小な存在

【Nコード】

N5009X

【作者名】

ただのこうら

【あらすじ】

ちっぽけな“僕”のお話。

今まで生きてきて、何もできなかった僕が・・・

＊作品の方向性を決めている段階です。もう少しでどういったものになるか公表します。それまでは過去話をどうぞ。

プロローグ

僕はちっぽけな存在だ。

僕は特に何かが得意な訳でない。言い換えるならば、僕は何もできない。自分で何かを決めてそれを成し遂げるなんてことはできない。やったとしても絶対にどこかでぼろがでてしまう。

本来の僕は何も出来ない子供そのものだ。しかし、僕はそれを隠し、ひょうひょうと生きている。心の中ではひやひやししながら。いつか僕の中身がさらけ出されるのではないかと。僕の矮小な存在が周りの人に見られるのではないかと。

僕はいつかそんなちっぽけな存在から変わりたいと思って、いや願っている。

僕の矮小な存在が変わる、そんなちっぽけな物語。

1話（前書き）

なんか唐突に書きたくなりました。
一つ言っておきます。

この作品はフィクションです。

1話

まず、どこから話そうか。

僕がなぜこんなおどおどビクビクした醜い人になってしまったのか。

別に誰かのせいにするつもりはない。強いていえば自分のせいだ。

僕が小学生の頃。

その頃の僕はまだ何も知らなかった。

人の心に潜む、闇。

それは嫉妬や執着、嫌悪といった感情だ。

人は必ずこういった感情を持っている。

今の僕でさえ持っている。

清廉潔癖な人はいない。そんな人がいたとしたら、その人は人じゃない。

そう、僕が5年生の頃。

僕は少し人より勉強ができた。

これは、人よりも運動ができないことを見かねた母親が僕に勉強を教えてくれたからだ。

母は僕が言うのもなんだが、完璧な人だ。

なんでも知っていて、なんでもこなせる。

そこらへんの親なんかより優秀だと思う。

もちろん人並以上に負の感情を持ち合わせている。

さて、話を戻そう。

僕は人より勉強ができたから、中学受験を受けることになった。

そのために僕は塾へと通った。

塾へと通うことによってますます僕の知識は深まった。それと同時に周りの人の視線が気になるようになった。特に学校の一部の人からの、嫉妬の視線が。

時は進み、6年生の2月。

中学受験の入試である。

あくまで、一つ述べておきたい。

僕はこの中学受験を受けるにあたってそんなに本気じゃなかった。まあ、言い換えれば少し勉強ができるから自惚れていたようだ。

結果、僕は受けた全ての私立中学に落ちた。

言い訳をすれば、全部チャレンジ校だった。

チャレンジ校というのは、自分の偏差値の少し上の学校のことだ。当然滑り止めなんて受けていなかった。

僕は自分なら受かると、甘い考えをしていた。

それがこういう結果を招いた。

傷心の僕が、久しぶりに学校に行ったときに待ち構えていたのは、嘲笑だった。

「アイツ、受験失敗したんだぜ。」

「落ちたくせに。」

「ざまあみろ、いい気になってるからこうなるんだ。」

僕は初めて出くわした嘲りに戸惑い、そして怯えた。

それまで浴びせられたことのない悪意の塊だった。

今から思うのは、よく残りの日数学校にいったな、ということだけだ。

はつきり言ってまだまだ僕は、それでも何も分かつちやいなかった。

中学のあのことを経験するまで。

1話（後書き）

次の更新はいつになるかわかりません。気が向くままに。

2話（前書き）

中学校時代前編です。とりあえず過去話です。

2話

僕は中学受験に失敗し、近くの公立の中学に入学した。

その公立中学校…R中は、近くの小学校3校の生徒が集まる中学校だった。そのせいか、一年生になり同じクラスになった人たちが30人余りの中に、同じ小学校の人は10人もいなかった。その中には僕に悪口を言った人たちはいなく、僕のことをあまり知らない人たちだった。

そのおかげで僕は新たな気持ちで中学校生活を始めることができた。

その一年間は楽しかった。友達ができ、他のクラスメイトとの関係も良好に築くことができた。中学生として勉強も頑張ったし、委員会活動も頑張った。

そのおかげか僕は心の負った傷…中学校受験に失敗したことから目を背けることができた。

また、僕に親友と呼べる友達ができた。彼の名前を、仮にT君としておこう。彼は聞き上手で、僕の話をよく聞いてくれた。彼とは様々な話をし合って、友情を深めあった。

この環境を僕はとても好ましく思っていた。このままずっと続けばいいのにとさえ思っていた。そんなことあるわけないと分かりながら。

やがて転機が訪れる。

僕が2年生に上がった時のことだ。

R中では学年ごとにクラス替えを行う。クラスは7クラス、一つあたりだいたい30人で構成されている。そしてクラス替えはどのクラスにも均等に同じ人が入るように決められる。つまり同じクラスに3〜4人は再び同じクラスの人というわけだ。

僕は、再びT君と同じクラスになった。

僕とT君は互いに喜び合った。

一学期が始まり、今までと同じように一日一日が過ぎていく、そんな感じに思えた。

いつの頃だろうか、

T君がいじめられていることに。

新たなクラスには何人か不良崩れみたいな人がいた。

その人たちにT君はパシリにされ、物を取られ、万引きさせられていた。

なぜ彼が標的にされたかはわからない。とにかく彼が標的になっているということだけが分かっていた。

だからといって僕は何もできなかった。

いや、何もしなかった。

自分の身に降りかかってくるのが怖くて、何もしなかった。

いくら親友がそんな目に合っていると分かっている、自分の身がかわいかった。

そう、僕は親友と自分の保身とを天秤にかけ、自分を取った。

親友を切り捨てた。

それからT君と顔を合わせるのが辛くなった。

昼休みのたびに購買へ行く彼の姿を脇目で見ながら、僕は悲しみと怒りで心がいっぱいになった。

彼に何もできない悲しみと、彼を切り捨てた自分への怒りと。

そして、僕は逃げ出した。

元々、僕は2年生に上がるときに転校しているはずだった。1年生の半ばで新たな家に転居して、隣の学区に住んでいたからだ。

だけど、僕は2年になっても転校することなくこのR中に通い続けていた。

ある意味、いつでも転校することができた。

逃げ道があった。

だから、僕は逃げた。

目の前の状況から、親友から、いじめられるかもしれないことから、逃げ出した。

2年生の半ば、夏休みに入る前に、僕はR中からM中へ転校した。誰に知らせることなく、ひっそりと。

T君にさえ知らせず、T君のメアドやその他諸々を消去した。

幸いと言っていいのだろうか、T君を僕の新しい家に連れてきたことはなかった。

だから僕はR中との関わりをほぼ完全に断ち切った。

僕は、このとき余りにも惨めで、何もできないちっぽけな存在だった。

それは今でも変わっていない。

3話（前書き）

3話までできました。とりあえず何度も繰り返しておきます。

この話は全くのフィクションです。現実のものとは全く関係ないです。

3話

僕がM中に転校して。

僕は何かに取り付かれたかのように勉強した。

全ては高校受験で志望校に受かるため、中学校受験での失敗を再び繰り返さないため。

それが良かったのかは今でもわからない。

ただ、僕の成績が良くなったのは事実だ。

幸い、M中には俺の成績に嫉妬する生徒はいなかった。

文句つけてくる教師はいたけれども。

その教師曰く、

「勉強だけが全てじゃない」

正直どうでもよかった。

塾の模試でも比較的高い点数を取ることができた。

学校でもいじめられることなく割と普通な人間関係を築けた。

物語にするにはつまらない、そんな期間だった。

それは言い換えれば僕が平穩に過ごせた期間かもしれない。

何かに集中できている間こそ人間は幸せなのかもしれない。

今から思うと、そういうものだと思う。

話を進めよう。

結局、僕は志望校を受験し、合格した。

ただそれだけ。

僕の中学時代は志望校に合格するだけだったと言ってもいいかもしれない。

それだけ僕はちっぽけな、つまらない人間だった。

さて、僕の高校時代の話までしてしまおう。どうせ僕は大学生までしか話すことはないのだから。

こういう鬱になる話はさっさとしてしまうほうがいいに決まっている。

これを聞いてもらっている人にも悪いからね。

僕が憧れのその高校、ここではW学院としておこう。どうせ、ここでしか使わないから適当ね。

このW学院はW大学の付属で、まあ簡単にいえば推薦権が“ほぼ100%だ。”

察しのいい君たちなら気づいてしまうかもしれないが、この“ほぼ”っていうのがミソだ。

これはあくまで入学要項になんか書いてやしない。

まあある意味100%なんだろう。

この意味はあとで説明しよう。

それと、あくまでこのW学院っていう名前には意味はない。

ただ僕がそう呼んでいるだけだ。

君たちがなにか聞き覚えがあったとしても、それとこれとはきつと違うだろう。

話を戻そう。

僕がW学院に入学して、いろいろなことがあった。
一々話していれば限がないので割愛する。

ちっぽけで何もできやしない僕がこのW学院に入って得たものは、

信頼の置ける友達

私学の教育

効率の良い人付き合いの仕方

ネット世界についての知識と経験

電車通学の経験

・・・何か間違ったものが入っていた気がするが、まあそれはいい。
それだけじゃない、僕が得たものは。

墮落

このことだ。

ある意味矮小な存在である僕が一番手に入れてはいけないものだ

ったかもしれない。

もしも墮落せずに努力を続けていたら、結果として今の僕にならないで済んだかもしれない。

後悔先に立たず。

さて、W学院に入学した僕は最大の難関にぶち当たることになる。もっとも今の僕の状態からすると“最大”ではないんだが。まあこの時点ですべてで理解して欲しい。

先程の話を思い出して欲しい。

そう、W学院からW大学に上がれるのが“ほぼ”100%だという話だ。

この“ほぼ”100%という意味は、留年だ。消費税と同じだけの留年率っていうのはどうだろうか。

もうあとは話さなくてもわかってくれるだろう。

僕はなんと留年しかけたことか。

ちっぽけな僕がこんな大学付属のW学院に入ったこと自体が奇跡に近いのだ。

まあ何はともあれ、僕は留年することなく3年でこのW学院を卒業することができた。

で、次は僕の大学生時代の話だろうって君たちは思っているかもしれない。

あながち間違っではないのだが、ひとつだけ付け加えておきたい。

僕はまだW大学に一日しか行っていない。
入学式行っただけだ。

僕はW大学の入学式に行った帰り、家路に向かう途中で何者かにいきなり何かを嗅がされて意識を失った、それだけだ。

3話（後書き）

プロローグが終わりです。次話から本格的にはなります。
もっとも次の更新は気まぐれでお送りします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5009x/>

矮小な存在

2012年1月13日21時50分発行